

貧困混成

——葉山嘉樹

『移動する村落』

試論——

荒木優太

一、「大人」になれば「分かる」？

坂本賢三は『「分ける」こと「わかる」こと』（講談社現代新書、昭五七・二）のなかで、「わかる」（理解する）という力能の基本的要件に「分ける」（区別する・分別する）という作業の必要性を認めている。坂本の提示する豊富な例から一例引けば、区別を欠いた「混沌」という語は元々、目も鼻も耳も口もない中国の皇帝の名前だった。『莊子』によると、皇帝に接待をうけた二人の帝がお礼に目鼻に相当する穴を空けてやった処、「混沌」が死んでしまった。この挿話が示しているのは、人の手の介入以前の蒙昧の塊り「混沌」（カオス）は目鼻になる穴を空けてやるという区別の作業を経ることで克服されるということだ。これは知の問題においても同様で、始めは「混沌」に似た区別なき印象や知覚の塊りが、（主に言語の力に宿る）区別や分類の過程を経ることでクリアーな理解が確立されていく。自然に発生する虹の色を分節 articulate する際に、各国語によって虹色を構成する色数に差が生れている事実は容易に「わかる」ことの「分ける」力を証左しているだろう。

「分かる」と「分ける」こと。知と分節に連関があることは恐らく確かであろう。そしてその延長線上で、多くの文化にあって、分節のコードの有無は大人と子供を分ける更なる分節の基礎として機能するだろう。子供たちは執拗に「何故？ どうして？」と、問いを際限なく発する。しかし成長していくにつれ、その問いは発話前に自身で反省され黙秘されたり、或いは問いそのものが消滅する。山間部の水力発電所のダム工事現場を舞台にした葉山嘉樹の長編新聞連載小説『移動する村落』（昭六・九～昭七・二）は、「分ける」と「分かる」の関係を、やはり成長の物語として提示している。

「何故、川は幅が狭くて長いが、海は幅だけで長さがちつとも無いのか？」。冒頭近くに置かれたこの問いは七歳の花が父親の虎に向けて投げかけたものである。二人は出稼ぎにダム工事場へ行く為に列車に乗っている。花は海に縁のある土地に住んでおらず、列車の中から始めて「海」を見たのだ。この問いに対し、「反問する以外の法を知らなかった」というように父親は答えられない。勿論、海には「長さ」がある。しかし子供にとってみれば「横許り広くつてさきが無」く「あの帆懸舟の一寸上までつきや無い」ように見え、その外見が実体自体の形状を決定しているように思われるのだ。

これに対して虎は「長さもあるんだけど、まだお前が小さいから見えないんだよ」と答える。「小さい」から、「見えない」。子供だから、分らない。虎は花に対して成長せよ、と命じている。

この場面はテキスト内で象徴的にリフレインされる。第十四章、「移動する村落」を形成する飯場の村民が近くの山から薪をとった処、役人がやって来てその調査をするという挿話だ。労働者の子供の一人、十一二歳の権坊は自分達の生活空間にある木を自由にすることに何故関係ない「役人」が介入してくるか分からない。所有地の概念を理解できていない訳だが、疑問に思う権坊に対して一人の労働者は「まだお前は子供だから分からねえんだよ」と諭す。ここでも成長の命令が下るのだ。

大人になれば「分かる」、だから成長せよ。この凡庸な命令が、『移動する村落』のテキスト全体を一面に於いて司っている。しかし、実の処、このテキストは自らが発したこの命令を自身で裏切るような自己背反的な振る舞いもみせている。例えば、絶え間なき花の問いに対して、虎は最終的に次のような科白で決着をつける。

「さう、手前のやうにうるさく、何故、何故つて聞くな。ちやんが何もかも知つてるやうだつたら、こんあ苦勞はしやしないや。いゝか、手前だつてそんなに惨めで無くつても済むんだ。いつて見りや、手前の知らない事あ、一つだつて ちやん にも分つてやしないな。だから、一々うるさく、もう聞くなよ。分る時がくりやすつかり分るやうになるんだ。それまでは、たれにだつて分るもんぢやねえんだ。分つたか」（第六章）

「分る時」、それが「大人」になった時であるのだろうが、しかし虎は自分の言葉を自身で裏切っている。「分かる」ことに「子供」「大人」という段階をつけ、後者に卓越性を与えていた虎の手続きは、しかし「手前の知らない事あ、一つだつて ちやん にも分つてやしないんだ」という告白によって一気に放擲される。「大人」になったからといって全てが「分かる」訳ではない。或いは、「大人」になろうが「子供」のまま留まろうが両者の知の様相に変化など殆ど認められない。その状況にあつて、「大人」などというものは実質を欠いた虚偽概念に等しい。

リフレイン時にあつても、同様のことが起こっている。即ち、権坊に「大人」の卓越性を認めていた労働者は同時に「何もかもなあ、権坊、一度に分つてしまふつて訳にや、大人になつたつて行かねえもんだよ。大人になると、分らねえ、つてことが分るぐれえのもんだ」（第一五章）と、その不能性をも吐露する。設けられた段階は、殆ど空虚と化す。その為、権坊が次のように考えたとしても何の不思議もない。「丁度河口の潮境見たいに、大人の世界と子供の世界とが、混り合ひもみ合つてゐた」（第十一章）。

花の冒頭の問いと権坊の感想は呼応し合っている。花が問うていたのは川と海の差異だった。「大人」である父虎はそこに差異があることを明言する。が、その答えは的を得たものではなく、そこでは単に成長の命令が一方的に下るだけであつた。これに代替するように、テキストは権坊の感想を配置する。つまり、「河口の潮境」がそうであるように、川と海にしる、「子供」と「大人」にしる、そこにある差異など殆ど機能していないのだ、と間接的に少年権坊は年下の花に応えている。

二、混成的世界の成立

権坊がいうように「混り合ひもみ合」いは『移動する村落』の世界観の中軸を占める重要な側面だ。そもそも、「移動する村落」とは何なのだろうか。胡沢健は葉山のテキストのなかでも忘却されがちだったこのテキストを機会あるごとに取り上げ、文学史において稀有な「離合集散」と「住所不定」のドラマを見出している。

「さまざまな履歴を持った、住所を持たない不安定でバラバラな労働者たちが、一瞬だけ集まり、「村」を形成し、そこではかすかな交流が生まれ、笑い声や連帯感のようなものが形づくられる。しかし、長つづきはしない。〔中略〕やがていつの日か、それ以前とは異なる現場、異なる労働者の組合せのもとに、思いがけない場所に出現するだろう。現われては消え、消えてはまた出現する。たえず合流し、一方で離れていきながら、どんどん形を変えながら移動していく。けっして消えはしないが、どこにいったか、どこへいくのか、最終的にはよくわからない」（「帰ってきた「移動する村落」——葉山嘉樹・年越し派遣村・吉田修一」／宇都見健児＋湯浅誠『派遣村——何が問われているのか』収、岩波書店、平二一・三。註＝胡沢はこの論文の他にも『日本文学』（平二一・九）や『だからプロレタリア文学』（勉誠出版、平二二・五）などでも『移動する村落』について論述している。この二つも参照した）

胡沢の強調するように「移動する村落」は「蚊柱」に喩えられ、「村」を構成する労働者は蚊が「どこからか飛んで来、絶えずどこかへ飛び去っている」ように、「離合集散の組合せ」を繰り返している（十六章）。ここから胡沢は「プロレタリア文学のみならず近代文学で「住所不定」の労働者を描き、「住所不定」それ自体をそのままドラマに生かした作家は、葉山嘉樹をおいてほかにはいない」という評価を下している。

しかし、胡沢の強調する「村落」の「離合集散」性は、その次の段階を準備していることを付け加えておかねばならない。その段階をこの試論では混成的世界と名づけておきたい。混成的世界とは「離合集散」のダイナミズムによって集団を構成する単位（村民）の組合せがシャッフリングされ、その予期不能な出会いによって、最終的に基礎単位そのものが混成的に変容を遂げていく世界を指す。

まず基本的に「村落」は流動的な労働者と固定的な農民のシャッフリング的状况にあった。即ち、「村から村へ、工事場から工事場へと移り歩く、一群の労働者と、確かに大地に根を下ろした栗の大木にも似た、土着の農民との、カクテルで、そこはあつた」（第二十五章）。「離合集散」による偶然の出会いは、カクテル（混合酒）的状况を生み出し、出会いの単位を構成する当事者そのものの混成的出自や変容をもたらす。事実、上記のような状況によって農民の「娘たちは頑丈な体格を持ち、重い玉石やセメント樽を『チンヤ、エンヤ』と、張り持ちして運ぶ、朝鮮生れの若い労働者と、屢々浮名を流したり、駆け落ちして行つた。そしてここで容易に想像できるのはカクテル的状况によって、恐らく雑種の＝混血の子供たちが生まれ、そしてまた高い確率で貧困によって「移動する村落」に再来してくるだろう、ということだ。

「離合集散」は結果的に新たな「村」民、集団の新たな構成単位を産む。そしてその新たな単位は既存の単位の単なるコピーというよりもハイブリッドに掛け合わされた混成的な単位の成立なのだ。カクテルの混合性は掛け合わされることで更なるカクテルを作り出し、累乗的に雑種性が増大していく。『移動する村落』が示しているのは、単に様々な生い立ちを追った村民が偶然の出会いと別れを繰り返す離合集散的な世界である以上に、そのシャッフリングが与える村民たちの混じり合いが村民自身の新たな出自や変容をもたらす混成的世界なのだ。

三、混成的世界の「家」

混成的世界の現われは単に血縁に限った現象ではない。再び花の一家に焦点化してみよう。テキストの冒頭は花と虎が列車に乗って出稼ぎに行く処から始まっていたが、それは一家の貧困が命じたものだった。虎一家にあって、一般的な性差（ジェンダー）による役割は反転している。虎は妻春子から次のように言われていた。

「お前さんは、なんて土偶の坊なんだらうねえ。女房子も養へないなんて。私がかせいであげるよ。いゝかい。その代り、お前さんは、花坊の守をするんだよ。私のやることにケチをつけないでくれよ。これだけはいつておくよ。つまり、男と女とが入れ代りになる訳だよ」（第一章）

男が外で稼ぎに行き、女が内で子守りをするという古典的な（或いは封建的な）家庭内役割の分別が逆転している。虎は今日でいう処の〈主夫〉を命じられる。しかし、それはフェミニスティックな観点からくる人権的な配慮によるというよりも、単純に働くことだけによっては家族を養えないという仕方なしの貧困によるものだ。

この出来事に象徴しているように、一般的に共有されるノーマルな男性像や女性像の分別は混成的世界では無効化している。主夫をする虎、男のように賭博や酒を楽しむ女房、そしてジェンダー分別の混乱の中、「男の子と変らな」言葉使いをする花は習慣がもたらす性差の混成の度合いをよく示している。

そもそも『移動する村落』に登場する「家」はどれも碌なものではない。花が育った「家庭」は「父も母と一緒に花〔札〕をもてあそぶといった風な家庭と、その家庭――といふのさへ実は、言葉が適当では無いのだが――の集まった、一つの集団のふん囲きの中で成長した」（第一章）と、「家庭」としての体裁も立っていない。

事情は、虎と花が出稼ぎのためS村へ向い、場所が移っても余り変わらない。「虎さんたちのやうな、土台の無い家ともいふべき人たちが、字義通り流れ込んで来」（第七章）でも、そこにある叔父の本妻の「家」は「家であると同時に、工事の材料にいつ変化するか知れない性質を持つて」おり、「一口にいへば木材と少量のガラスとくぎで出来上がった「家」であった（第四章）。或いはバラック飯場はそれよりも「もつともつと粗悪な、材料そのものといった風なものであつた」（第七章）。家庭の物質的基礎になる家は、ここでは単なる「材料」の集合でしかなく、設置が容易な代わりに解体も又簡易な仮住居といった様相しか示さない。限りなく仕切りを排したこの住居の軽易構造のためか、登場人物たちはプライベートな空間をもつことなく、誰の視線も受けず孤独な内省にふける場面は本編では殆ど描かれない。このような状況にあって、混成的な習慣の影響を回避することは難しい。

混成的世界を構成する村民は備わった流動性の高さによって「土台」（住所）を持った「家」を持つことなく、「流れ」に身を任せることになる。ここにあって、あらゆる「家」は仮宿でしかなく、束の間の休息のためにはインスタント的な「材料」の寄せ集めで事足りるのだ。そして、この建築術は、無論、期間限定で全国から集められてきた「村落」の形成過程の象徴的な一つの現れだと考えられる。

四、道徳的「分別」の破綻

本稿は冒頭で、「分かる」ことにおける「分ける」力の重要性をみていた。「分ける」ことは混成的世界にあって放棄される。血縁の闘、ジェンダーの区別、そして何より知の根本的条件を、混成的世界は「混り合ひもみ合」う力で、放擲しているように思われる。「分ける」ことが「分かる」ことの条件であるならば、その分別を無化してしまうような混成的世界にあってクリアな理解は得られない。

一見無条件に与えられているように見えた「分ける」力には一定の環境の条件が求められる。端的にいうならば、貧困は混成的世界を呼び込み、知の秩序を攪乱してしまうのだ。貧困とは無いことではなく、有りすぎることだ。貧困とは、欠如ではなく過剰なのだ。

「子供」の問いに答えられない「大人」は極めて象徴的だ。両者の知の様相は「河口の潮境見たいに」混じり合っているように見え、段階付けをすることができない。

或いは、或る労働者の妻は毒舌で「考へを言葉にするのではなくて、言葉だけで飛び出す」癖を持っていることを考えてみてもよい。その世界にあって、「言葉」は「考へ」（理解）の表象に繋がれることなく、それ自体で独立に展開し、事象の分節に殆ど仕えていない。彼女が「早く大人になる事さ。それより外にや、何ともかんとも分別のつけやうがないよ」（第二六章）と親父と同じく花に成長の命令を下していることは皮肉だ。「大人」になったとしても花や権坊に対峙した「大人」がそうであったように、決して「分別」など立ち現れてくるものではない。

処で、「分別」という言葉には知的であるという意味と共に道徳的な意味合いが込められている。分別盛りといえ、豊かな人生経験がもたらす物事の道理が最もよくわかる成人の年頃のことを指す。このような二重の意味合いはやはり『移動する村落』にあって妥当するように思われる。つまり、混成的世界は知的分別とともに道徳的分別を、分ること分らないことの区別とともに、悪いこと悪くないことの区別を喪失させている。

糊沢は村民の特徴を「さまざまな履歴を持った」者たちの集合と見なしていた。それは客観的にみれば正しい。しかし、その「さまざま」という多様性はその集団の中で顕在化して来ないという点は重要だ。というのも、「村落」の中であって村民の多くは「自分の生ひ立ちや経歴を話す事を嫌った」（第十三章）からだ。そのため、「この労働者たちの群位、前身が何であつたか分りにくい所は無かつた」。

その理由は「頭の中の一つのピンが触つても、痛くて飛び上る位の思ひ出であつたのではあるまいか」という推定がなされているだけで定かではないが、とにかく、彼らは経歴が謎の集団で生活している。これには例外がある。即ち、「傷害致死犯、賭博犯、殺人犯の前科を有する者だけ」が「自分の経歴を話すことを好んだ」のだ。この傾向性によって「村落」は実状とは別に、対外的なイメージにおいて反社会性や無道徳性を帯びることになる。何故なら、「犯」罪自慢だけが外的に発話され、それ以外の過去が黙秘されるのであるならば、実体とは別に当然顕在化している発話が「村落」の性格のイメージを決定するからだ。

しかしこれは偏見的で表層的なイメージだけの問題に止まらない。事実、テキストは犯罪の多発を仄めかしている。花や虎が着いた飯場よりも上流の朝鮮人の多い飯場で起こった姦通事件では（第三三、三四章）、それが「法律上、道徳上許された処の私刑」に類する事件であつたが、しかし朝鮮から来た多くの村民たちは「殺してもいゝか、悪いか」が分らず、警察に聞くために縛った手足を棒に通して担ぐような非人道的な方法でF署まで下る。彼らは警官からその方法を叱られるが「日本の事情に精通しない」故に「不足さうな顔付をして、ポカンとし」、「悪いことをしたのは、俺たちではない」と信じ込む。民族の混成的状況が、法の分別性の一般化を拒絶し、悪意なしの犯罪の連鎖を作りだしていく。

或いは、物語の中心的な登場人物であつた虎は妻の下に帰省した際、妻春子を殺してしまう。その仔細

な状況は語られないが、しかし、その事件を経て、判決が下った虎に対して、ある労働者が言うには、「それにしても虎さんは、はくをつけて来たといふもんだ。この社会ぢや、こいつが無いと幅が利かないからな」（第四十章）と肯定的な評価が与えられる。虎は「村落」において「経歴」を獲得した。社会的法的な「分別」は混成的世界において通用せず、その「社会」では逆に犯罪の経験が一個の財産となる。この挿話は混成的世界が、知性以上に、道徳性をも混沌にさせかねない危険を物語っているといえるだろう。

五、川と海と「濁流」

「はくをつけて来たといふもんだ。この社会ぢや、こいつが無いと幅が利かないからな」。ここで、冒頭の問いであった海と川の差異に戻ることは決して無駄なことではない。何故なら、その問いとは「何故、川は幅が狭くて長いが、海は幅だけで長さがちつとも無いのか？」であったからだ。「幅だけで長さがちつとも無いのか？」という問いは、「幅」だけが利いてどうするのかという読み手の素朴な問いを予告している。犯罪行為の経歴だけが承認される「社会」（村落）はしかし当然、決して貧困からの脱出を手助けしてくれる訳ではない。

川と海のイメージは冒頭は勿論のこと、このテキスト全体をも司っている。虎は最終的に花を残して死ぬが、彼の死は大雨によって氾濫した木曾川の「濁流」に巻き込まれた事故（或いは、自殺）によるものだった。

川の氾濫。花にあって辛うじて維持されていた川と海の差異は終末付近で殆ど意味をなさなくなっているように思われる。実際、「吹雪にでもなれば、川向ひの飯場は、何の事は無い、沖がよりした船がサンパン止めに会ったのと同じだった」（第七章）と天候の変異が、容易に川の海化をもたらすことは予告されていた。一方向的に、海に向かって整流化された川は自然の猛威によって、そのコースを逸脱し多方向的に広がっていく。「長さ」に整えられない水の流れは限定的に出現した「幅」だけの海でなくてなんだろうか。

これは殆ど「移動する村落」そのものの比喩である。行き当たり場当たりの村民の多方向の移動（離合集散）と偶然の出会いによる事件乱発は、川の一方向な流れというよりは、海の波が更なる波を連鎖的に作り出す多方向で予期不能なランダムな流れに近い。

混成的世界は冒頭で掲げられた川と海の差異を、最終的に放擲し、「字義通り流れ込んで来た」虎を、今度は現実の川のような海のようなあいまいな「濁流」で流し込み、殺すのである。

六、混成の希望——漁民の「哲学」

以上、『移動する村落』の混成的世界の内実について分析してきた。混成的世界への入口の根本には貧困問題がある。逆にいえば貧困は、様々な区別や分別や分節を放擲し、越境的に様々な混成体を生んでいく。『移動する村落』が提示するのは、貧困とは、端的に「分ける」ことの貧困である、ということだ。

しかし最後に、混成的世界は決して悲劇や悲嘆だけに満ちているのではない、ということは付け加えておきたい。そこでは通常考えられないような偶然の出会いが生起しやすく、そこにあつての奇跡的な出会いは、否定性に回収されない新たな分節の可能性を宿すかもしれないのだ。

例えば、テキストの後半にあつて、人不足となった花のいる飯場に漁民たちが大勢出稼ぎにやってくる。その姓は、集落が同じであるためか、みな一様に小林で、彼らの投入によって「帳場には非常に家族的な空気が流れ始めた」。碌な「家」がなかった飯場に別の集団の一群を収容することで、混成的世界は「家族的な空気」の感染をもたらせる。

加えて、彼らは混成的世界にあつて、重要な「哲学」を持っていた。それは「祖先の位牌」を決して手放さないという「哲学」だ。引用しよう。

「通常陸上で生活してゐる場合には、大抵の場合では位牌は遺骨の出張所である。が、漁民の場合では、遺骨の代りの位牌が多いのであつた。

遺骨は、遠い、深い、太平洋の海の底に沈んでゐるのだ。或は一度、鱧の内臓を通つて、或は舟か何かの金具か、発動機の一部と共に。

その遺骨を表象する位牌であつた。

それを質屋で『流す』ことは、自分の父か、祖父か、又は兄かを、も一度『流す』ことになるのだつた。

「俺は流されても位牌丈けは流さねえ」

これは漁民の持つ伝統であつた。

彼らの哲学は、陸だけに棲む人間とは違つてゐた」（第三六章）

海で暮らす者たちの「伝統」的「哲学」は、川と海との差異を殆ど放擲し、海の波のように全てが多方向に流動化していく混成的世界にあつて自身の居場所を確保するために極めて重要だ。漁民の「遺骨」の宛先は、「移動する村落」の村民のように、離散し、多く不明となる。しかし、それを「表象」する「位牌」を決して手離さないことで、漁民たちは親族と自身とが固く結ばれているという繋がりをもつことができる。

それは自身に備わっている、「伝統」に連なる明確な過去の証し、ある具体的な系統への所属の証しを保持していると言い換えてもいいだろう。この過去や「伝統」は、村落内（「社会」）だけで通用する犯罪自慢でしかない「経歴」とは違って、一時的な集団を超えた自身の歴史的なルーツを指し示す。流動的な世界（「流す」ことが常態化した世界）にあつて、その信頼可能なルーツこそが（「流し」てはいけないという）分別性を保持させる。そして、その分別性への信頼があるがために、「小林たちは、浪のやうに揺れ、滝のやうに流れることを、何とも思つてゐない」ことができるのではないだろうか（第三六章）。自身の居場所が一つ確保されれば、どのような移動も怖くはない。「自分の父か、祖父か、又は兄」なども自分と同じだったのだから。

思えば、花は虎との列車の旅で始めて海を見たくらい海の文化とかけ離れた処で住んでいた。混成的世界は、そんな彼女に漁民たちとその「哲学」に触れ合わせる機会を設定することに成功している。勿論、その根底には貧困がある。しかし「濁流」に父親が呑み込まれた花にとって、漁民たちと同じくその「遺骨」は「遠い、深い、太平洋の海の底に沈んでゐる」か「或は一度、鱧の内臓を通つて、或は舟か何かの金具か、発動機の一部と共に」あるだろう。最早、彼女は「陸だけに棲む人間」とはいえない。そして、漁民の「伝

統」的「哲学」はきっと彼女の新たな財産、新たな知的・道徳的分別の生起のきっかけを与えてくれる筈だ。

漁民たち、「彼等が来てからの飯場は、暢気で、陽気で面白かった」とテキストは伝える。その陽気さは混成的世界のなかで生き抜くための「哲学」の重要性を教えていると共に、一見否定的な環境条件にみえた混成的世界を、肯定的な価値創出の空間へと反転的に再規定することの希望を暗示している。何故なら、混成的世界とは予期不能な偶然の出会いによって、確固とした闘を許さず、様々な人や精神のカクテルを生み出すことができ、それは学校や会社務めに典型であるような固定化した行動様式や人間関係に亀裂を生じさせ、ブルジョワ的ルーティンからは予想もできなかったような新たな行動や関係や思考を生み出す可能性を秘めているからである。

混成的世界は既存の分別に対して破滅的に機能してしまうが、一方そのダイナミズムは驚くべき新規の分別を創出（混成）する力でもありうる。漁民たちとの出会いを経た花がどのように成長していくのか、それはいまだ未定であり、未定という未来はこのテキストが残してくれた希望なのである。

（引用は『淫売婦・移動する村落』（岩波文庫、昭二九・一）を使用した。但し、傍点は傍線に置き換えた。尚引用文内の〔〕は引用者による注記である）。

（2012・3・1）

貧困混成——葉山嘉樹『移動する村落』試論——
<http://p.booklog.jp/book/45529>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/45529>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/45529>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ